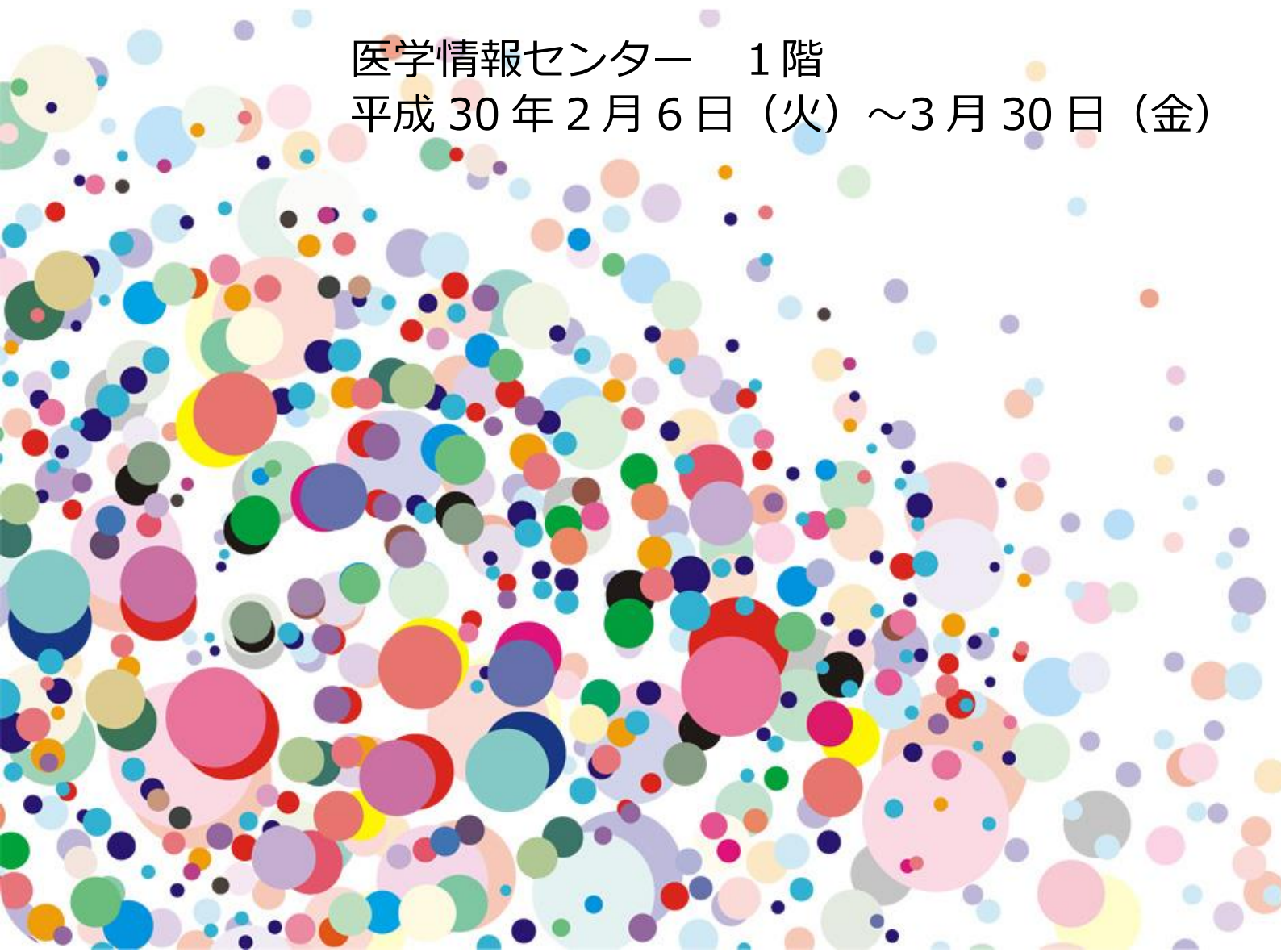


平成 29 年度第 4 回医学情報センター貴重書展示

生理学 ことはじめ

医学情報センター 1階

平成 30 年 2 月 6 日 (火) ~ 3 月 30 日 (金)



江戸時代にオランダから伝わった西洋医学を学んだ蘭学者たちは、医術を行ったり薬を処方したりするためには、まずは人体に対する理解を深める必要があるということに気づきました。解剖学的な側面からの理解は、宝暦9（1759）年に刊行された山脇東洋の『蔵志』や安永3（1774）年に刊行された前野良沢・杉田玄白の『解体新書』などにより進んでいましたが、生理学的な側面からの理解は遅れていました。これは、古くから盛んに行われてきた解剖学とは異なり、生理学が西洋においても18世紀に入ってから盛んになったことによります。日本に生理学が紹介され、日本人による生理学書が刊行されたのは、19世紀に入ってからのことでした。

西説醫原樞要 存2巻（巻1、2）1冊

高野長英著

天保7（1836）年刊の写し

現在に伝わるもの全5巻

日本で初めて刊行された生理学書。オランダの生理学書数種をまとめて書かれた。高野長英は、幕府の鎖国政策を批判し、蚕社の獄で投獄された人物として有名だが、若いころからシーボルトの元でオランダ語・医学を学んだことでも知られ、公衆衛生や臨床医学などさまざまな分野の著書・訳書がある。

西説醫範提綱釋義 3巻3冊

（題簽：醫範提綱、扉：和蘭内景醫範提綱）

宇田川〔玄眞〕（榛齋）訳述 諏訪士徳筆記

弘化2（1845）年刊（文化2（1805）年刊本の再刻）

西洋の解剖学書数種を翻訳し、要点をまとめて書かれた書。広範な解剖学的記述と消化に関する生理学的記述を見ることができる。かな交じりの文体で書かれたこの書は、分かりやすく読みやすいと重宝され、当時の医師に最もよく利用された医学書となった。

生理発蒙 13巻 函1巻 14冊

（蘭）李邈〔リバック〕著 島村鼎甫訳

慶應2（1866）年刊

Douwe Lubachによる“Eerste grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch”（1855年刊）の翻訳。函譜を140枚含んでいる。島村鼎甫は緒方洪庵の適塾に学び、福沢諭吉とも親交があった。福沢諭吉の著書『福翁自伝』には、島村鼎甫が本書を苦労しながら翻訳していた様子が書かれている。

参考文献：

- ・日本における西洋医学の先駆者たち。ジョン・Z・パワース著；金久卓也，鹿島友義訳。慶応義塾大学出版会，1998.11